

楕円曲線演算

- 楕円曲線暗号の概要
- 楕円曲線上の演算
- 楕円曲線演算の実装
- 楕円点の加算と減算
- 楕円曲線演算の高速化
- 楕円曲線の構造
- 楕円離散対数問題の解法

ペアリング演算

- ペアリング写像
- 楕円ペアリング

暗号の数学 (基礎)

- 整数論の基礎
- 素数
- 剰余演算
- 原始根
- 計算量
- 数の表現
- 演算の高速化
- 集合と写像
- 代数系
- 素体と拡大体
- 奇標数の拡大体
- 標数2の体
- 標数3の体
- 有限体上の演算

暗号理論

- 暗号アルゴリズム

楕円曲線演算の高速化

楕円曲線演算の計算量

▶ 標数 $p > 3$ の体
楕円加算と2倍算の計算量を下表に示す。表において、 I は逆元を M は乗算を示す。例えば、アフィン座標系での加算は、逆元1回と乗算3回で実行できることを示す。

楕円演算の演算量(標数 $p > 3$ の体)		
演算	アフィン座標	射影座標
加算	$1 I + 3 M$	$16 M$
2倍算 ($a \neq -3$)	$1 I + 4 M$	$10 M$
2倍算 ($a = -3$)	$1 I + 4 M$	$8 M$

一般的に、逆元時間 $> 5 \sim 10 \times$ 乗算時間ならば射影系の座標が高速になる。

▶ 標数 2 の体
楕円加算と2倍算の計算量を下表に示す。表において、 I は逆元、 M は乗算、 S は平方算を示す。標数2の体の場合、平方演算のコストは通常の乗算に比べてはるかに低いため、乗算と平方算を区別している。表から分かるように、標数2の体の場合、射影座標において点を2倍するコストは一般の点の加法に比べて3倍近く高速になる。

楕円演算の演算量(標数 2 の体)		
演算	アフィン座標	射影座標
加算 ($a \neq 0$)	$1 I + 2 M + 1 S$	$15 M + 5 S$
加算 ($a = 0$)	$1 I + 2 M + 1 S$	$14 M + 4 S$
2倍算	$1 I + 2 M + 1 S$	$5 M + 5 S$

楕円点の k 倍算

楕円曲線における点の k 倍算 (スカラー倍算) は、アーベル群における一般のべき乗計算問題の特別な場合である。そのため、一般の整数における演算の高速化手法が適用可能である。

二進展開法 (Binary method)

入力: 点 P , n ビット整数 $k = \sum_{j=0 \sim n-1} k_j 2^j$, $k_j \in \{0, 1\}$.

出力: 点 $Q = [k] P$.

- $Q \leftarrow O$
- For $j = n - 1$ to 0 by -1 do
- $Q \leftarrow [2] Q$
- If $k_j = 1$ then $Q \leftarrow Q + P$
- Return Q

二進展開法では、 n を k の二進展開の長さ、 W を k における1の個数とすると、 $n - 1$ 回の2倍算と $W - 1$ 回の加算を必要とする。平均的に $W = n/2$ とすれば、これらの回数はそれぞれ、 $n - 1$ 、 $n/2 - 1$ となる。

m 進展開法

m 進展開法は、 k の m 進展開を利用する。ある $r \geq 1$ に対し、 $m = 2^r$ とする。 $r = 1$ の場合は二進展開法になる。

入力：点 P , 整数 $k = \sum_{j=0 \sim d-1} k_j m^j$, $k_j \in \{0, 1, \dots, m-1\}$.

出力：点 $Q = [k]P$.

事前計算：

1. $P_1 \leftarrow P$
2. For $i = 2$ to $m-1$ do $P_i \leftarrow P_{i-1} + P$ ($P_i = [i]P$ を計算)
3. $Q \leftarrow O$

主計算：

1. For $j = d-1$ to 0 by -1 do
2. $Q \leftarrow [m]Q$ (2倍算を $r(m=2^r)$ 回実行)
3. $Q \leftarrow Q + P_{k_j}$
4. Return Q

移動窓法(Sliding window method)

移動窓法では、乗数 k のビットは、長さ r のブロック(窓)の中で処理される。 $r > 1$ を仮定する。

入力：点 P , 整数 $k = \sum_{j=0 \sim n-1} k_j 2^j$, $k_j \in \{0, 1\}$.

出力：点 $Q = [k]P$.

事前計算：

1. $P_1 \leftarrow P, P_2 \leftarrow [2]P$
2. For $i = 1$ to $2^{r-1} - 1$ do $P_{2^{i+1}} \leftarrow P_{2^i} + P_2$
3. $j \leftarrow n-1, Q \leftarrow O$

主計算：

1. While $j \geq 0$ do
2. If $k_j = 0$ then $Q \leftarrow [2]Q, j \leftarrow j-1$
3. Else do
4. $t \leftarrow j-t+1 \leq r$ と $k_t = 1$ である最小の整数とする
5. $h_j \leftarrow (k_j k_{j-1} \dots k_t)_2$
6. $Q \leftarrow [2^{t+1}]Q + P_{h_j}$
7. $j \leftarrow t-1$
8. Return Q

符号付きm進展開窓法

符号付き数表現

符号付き桁(SD: Signed Digit)表示とは、

$$k = \sum_{i=0 \sim m_{s_j}} s_i 2^i, \quad s_i \in \{-1, 0, 1\}$$

の形式の数表現である。この表現は、二進数表示を含み、またすべての整数 k ($0 \leq k \leq 2^{m+1} - 1$) も含まれている。しかし、この表現は 3^{m+1} 個の組合せがあるので冗長である。

SD表現が空疎(sparse)であるとは、隣接した0でないビットが存在しないこと、すなわち任意の $i \geq 0$ について $s_i s_{i+1} = 0$ となることである。この表現は非隣接形式(NAF:non-adjacent form)と呼ばれる。任意の整数 k はNAFを一意に持ち、以下のアルゴリズムで求められる。

NAFへの変換

入力：整数 $k = \sum_{i=0 \sim m-1} k_i 2^i$, $k_i \in \{0, 1\}$

出力：NAF $k = \sum_{i=0 \sim m} s_i 2^i$, $s_i \in \{-1, 0, 1\}$

1. $c_0 \leftarrow 0$
2. For $i = 0$ to m do
3. $c_{i+1} \leftarrow \text{floor} [(k_i + k_{i+1} + c_i)/2]$ ($i \geq m$ に対して $k_i = 0$)
4. $s_i \leftarrow k_i + c_i - 2c_{i+1}$
5. Return $(s_m s_{m-1} \dots s_0)$

符号付きm進展開への変換

入力: 整数 $k = \sum_{j=0 \sim d-1} k_j 2^j$, $k_j \in \{0, 1\}$, $k_j = 0$.

出力: $\{(b_i, e_i)\}_{i=0 \sim d-1}$ の数列。

1. $d \leftarrow 0, j \leftarrow 0$

2. While $j \leq l$ do
3. If $k_j = 0$ then $j \leftarrow j + 1$
4. Else do
5. $t \leftarrow \min\{l, j + r - 1\}$, $h_d \leftarrow (k_t k_{t-1} \cdots k_j)_2$
6. If $h_d > 2^r$ then do
7. $b_d \leftarrow h_d - 2^r$
8. 数 $(k_l k_{l-1} \cdots k_{t+1})_2$ を1増やす
9. Else $b_d \leftarrow h_d$
10. $c_d \leftarrow j$, $d \leftarrow d + 1$, $j \leftarrow t + 1$
11. Return 数列 $(b_0, e_0), (b_1, e_1), \dots, (b_{d-1}, e_{d-1})$

▶ 符号付きm進展開窓法

入力 : 点 P , 整数 $k = \sum_{i=0 \sim d-1} b_i 2^{e_i}$ を満たす $\{(b_i, e_i)\}_{i=0 \sim d-1}$.

出力 : 点 $Q = [k]P$.

事前計算 :

1. $P_1 \leftarrow P$, $P_2 \leftarrow [2]P$
2. For $i = 1$ to $2^{r-2} - 1$ do $P_{2^{i+1}} \leftarrow P_{2^i+1} + P_2$
3. $Q \leftarrow P_{b_{d-1}}$

主計算 :

1. For $i = d - 2$ to 0 by -1 do
2. $Q \leftarrow [2^{e_{i+1}} - e_i] Q$
3. If $b_i > 0$ then $Q \leftarrow Q + P_{b_i}$
4. Else $Q \leftarrow Q - P_{-b_i}$
5. $Q \leftarrow [2^{e_0}] Q$
6. Return Q

演算法の比較

楕円点の k 倍算 $P = [k]Q$ を計算する場合, k の値は次のように分割されて処理される.

$k = 1001010110110100010100100010$


- 2進展開法
1001010110110100010100100010
- m 進展開法 ($m = 4$)
1001 0101 1011 0100 0101 0010 0010
- 移動窓法 ($r = 4$)
1001 0 1011 0 1101 000 101 00 1 000 1 0

2進展開法では全てのビットが順番に処理されるが, m 進展開法では4ビットの窓7個に対して処理が行われる. また, 移動窓法では6個の窓に対して処理が行われる.

[< Prev](#)

[Page Top](#) [↑](#)

[Next](#) [>](#)

Last update : 05/12/2016 18:00:00 / 

[Powered by FC2ホームページ](#)